

「身じまい」のおと



滝野隆浩
社会部編集委員

◎若林健次

この欄のタイトル案を編集担当者に渡したとき、「どんな音なんですか？」と聞かれた……

そうか、「身じまいの音」と読まれたらしい。改めて想像してみる。人生最後の日、朝起きたら、リンリンとか、ゴーンゴーンとか音が聞こえてきたらおもしろいかも。キンコンカンゴーンとチャイムが流れて、ハイおしまい、とか。

「身じまい」の部分については、うんうん考えた。広辞苑には八身仕舞^{ハツシマヰ}＝身なりをつくろい整えること^{トク}とあるが、△終い^{ハツ}かたをつけ、終りにする^{トク}でもある。「くする」ではななくて、「くする」。そんな能動的な響きが気に入って、タイトルは「身じまいのおと」にした。

人生の「おしまい」は、無理はしないけれど、あんまり周囲にご迷惑をかけずに片づけたいと思う。私も55歳となって、家人に言わせれば「もう初老」。そういえば、先日、運動途中、駅に続く歩道でコケた。さほど起伏があるようには見えなかったのに。もう若くはない。九州でひとり暮らしの母はいまは元気だが、先のことを思うと心配がないわけではない。読者のみなさんも、これからのこと、何か気になっているはず。「おと」は「ノート」NOY。メモ

「死」について読者と考えたい

を取りながら、さあ、一緒に考えていきたいと思います！

ただ、そうはいっても、役に立つ情報をつらつらお知らせするだけの欄にはしたくない。30年以上やってきて、記者生活の最後は「死」についてじっくり考えてみたいと思っている。自分の命が終わる、とは何なのか。なんのために生きてきたのか。いや、誇るような人生ではないけれど。死んだらどうなるのか。死ぬ前にすることは、あるのか。ないのか、考える。

幸気くさい？ その時が来たらさっさとおしまいになさいますか？ それが理想。でも、なかなかそうはいかない。だから、悩む。私の悩み、おすそ分けしたい。

ところで、この首都圏版というページは、インターネット連動紙面である。この記事も、本日、この紙面に出てくるまでに「フェイスブック」で読者と投稿し合っていて、できている。おしゃべりな私は、ここにある文字数以上のことを、ただただ話したためている。その「だから」「や記事への感想、批判、提案などをいただければありがたい。やりとりしながら考え、また悩む。いきつくところは「死」だから。取り上げるテーマも、少しずつ変わっていくのかもしれない。もちろん、従来通りのお手紙も待っています！

次回から取り上げるのは、いまはやりの「身じまい」。「お墓の引っ越し」とか「改葬」にもつながる。世界45カ国を回った墓の比較研究の第一人者、長江麗子・聖徳大教授(81)に会いに行った。千葉県松戸市にある部立八柱霊園前の墓石屋さんの3代目社長でもあるから、実務もよく存じらしい。この人に